

教学領域における質リテラシーの 醸成に関する現状と課題

愛媛大学教育・学生支援機構 教育企画室

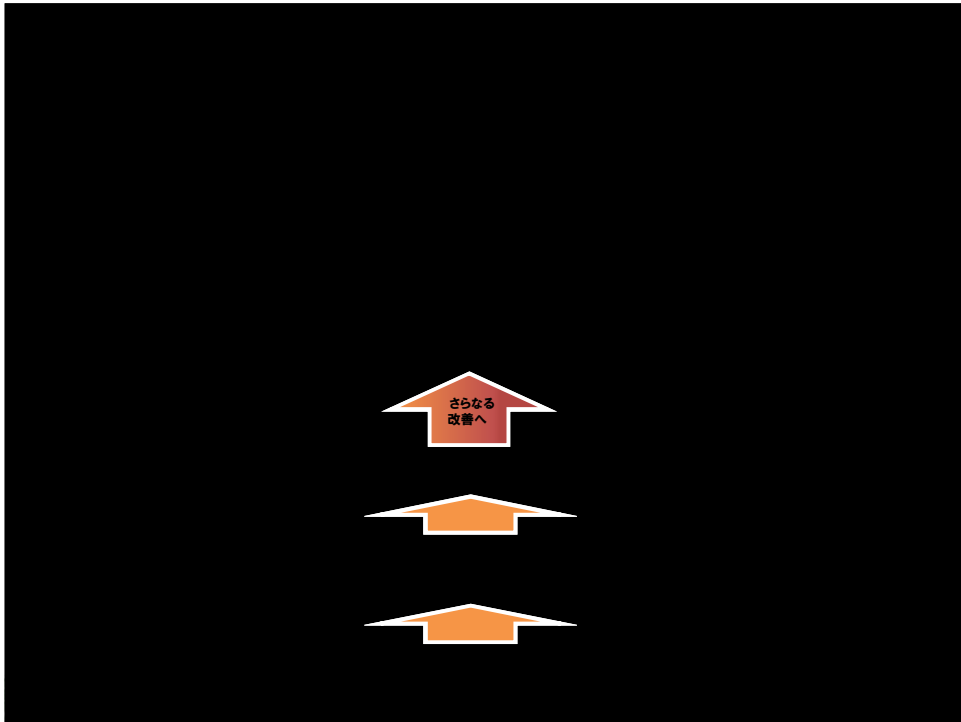
副室長・教授 秦 敬治

k-hata@iec.ehime-u.ac.jp

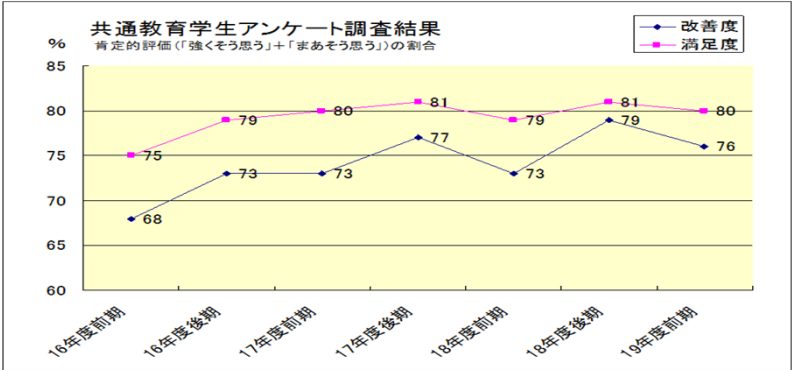
1

教学IRの現状と課題

1. ハード面の充実
 - ・平成16年頃(国立大学法人化)から徐々に進める大学が増えたが、課題も多い・・・
2. 専門家の配置
 - ・専門家の不在から教職員入り混じる
 - ・ただし、教学IRは教職協働が望ましい
3. 分析対象と手法
 - ・何を対象に分析するのかが明確でない(広げればどれだけでも広がる領域)
 - ・最適かつ共通の手法が確立されていない



アンケート調査の限界



改善度も満足度も右肩上がりでは良くなったが、一定ラインまで到達すると停滞します。そのため、数値的な改善から質的な改善への転換が求められた。 (教育企画室では授業評価アンケート廃止の議論も行っている＝本質的な改善につながらない)

アンケート調査の限界

そもそも学生にアンケート調査を行うだけで教育の質保証を醸成できるのでしょうか？？？？

【教育改革担当者のジレンマ】

- ・大学教育の質は、どの時点で測定すれば的確なのか？
(例、授業終了時、卒業時、10年後、人生を終える時点)
- ・大学教育で培った能力はDP・CPと一致するのか？

そもそも本当にDP・CPの達成が目指されているのか？

EHIME UNIVERSITY 愛媛大学 (DP・CPを包括するコンピテンシーの策定)⁵

授業改善のための質的IRの試み

第1層(ミクロ・レベル): 授業の改善 (Instructional Development)

個々の授業をより良いものにするための取組。具体的には、授業評価アンケート、教員相互の授業参観、授業コンサルテーション、教授法に関する講演会、シンポジウム、ワークショップ、セミナーなどがこれにあたる。

具体例: 中間期の振り返り (Midterm Student Feedback)

コンサルタントが、授業に入り、学生から当該授業の良い点、改善してほしい点を具体的に聞き出す。この間、授業担当者は教室外で待機する。後日、コンサルタントがクライアントに結果を伝え、そのデータを基に、両者が課題解決策を検討する。授業アンケートに比べて、詳細で膨大、かつ公平なデータを収集することが可能であり、教員の行動改善に結びつきやすい。

EHIME UNIVERSITY 愛媛大学

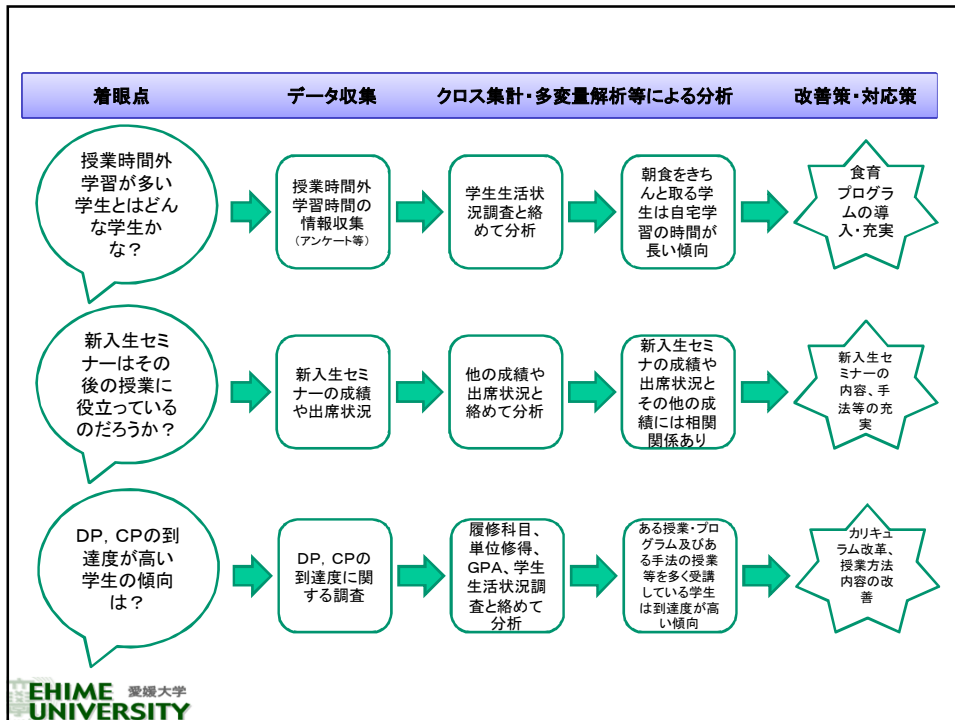
サッカーW杯ドイツ代表から学ぶ

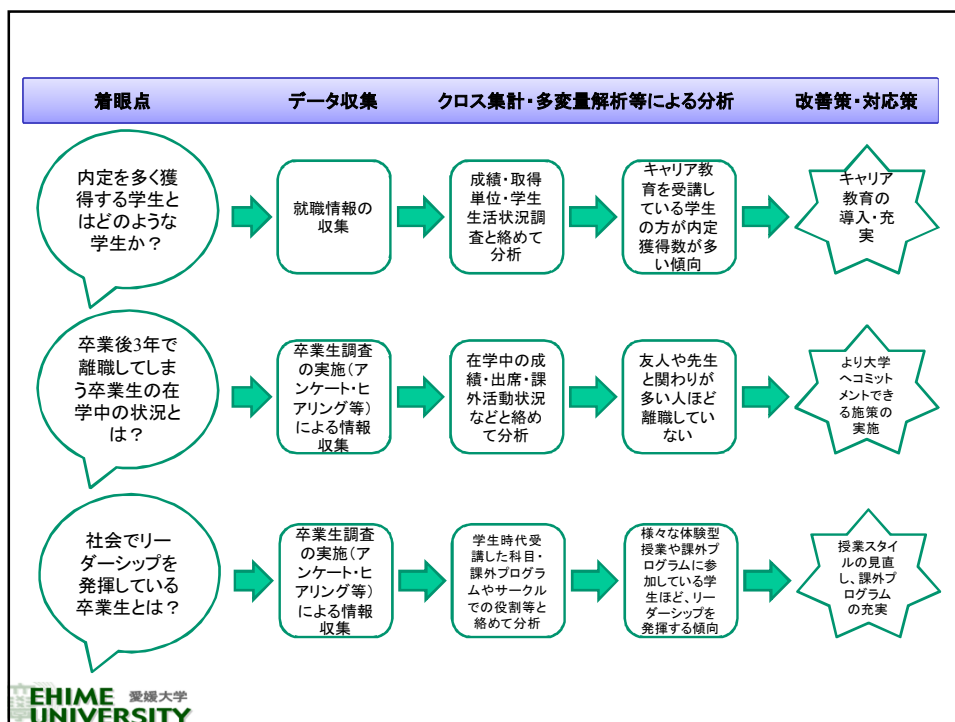
ドイツ代表は2006年地元W杯大会で優勝することができなかった。そこで、世界一になるために

1. 何が足りないのか？
2. 何を強みとするのか？
3. 目標数値はどこに設定するのか？
4. それらを確実に分析するための手法はどのようにすれば良いのか？

2006年2秒台～2014年1秒を切る戦い

* 残念ながら教学IRはサッカー界より大きく遅れている＝明確な目標設定と強い意志に欠ける





高等教育の質・量・スピードの充実

1. 高等教育の質の充実

教学IRにおいて真の質の分析が行われているとは思えない。すなわち、DPの達成度が客観的に行われていない。また、教育改善につながる質的なデータが少ない(アンケートと授業単位の成績中心)。

* 高等教育界共通の客観的な測定指標やツールが存在すれば良いが、なかなか簡単には開発ができない

高等教育の質・量・スピードの充実

1. 高等教育の質の充実

例えば、先程のドイツのサッカーと授業時間外学習の関係で言うと、

- ・ドイツのサッカーは、時間だけではなく質（内容や精度）までこだわっている。
- ・授業時間外学習は、時間ばかり測定（それもアンケート・主観）していて、その質や内容まで調査されていない

高等教育の質・量・スピードの充実

2. 教学IRの分析対象とする量的な課題

膨大な量のデータを無限に分析し続けることは非常に難しい（当初はそのような対応を目指した大学もあった）。

ターゲットを絞り、深く追究することの方が改善・改革には役立つのではないか？

* 研究と同じで焦点を絞り、仮説を立て、
多面的な分析を行うことが期待される

高等教育の質・量・スピードの充実

3. 一連の教学IR処理に関するスピード(効率)の課題

- ①対象を絞り、仮説を立て、調査、分析までの時間短縮・効率向上
- ②①のためのハード面・ソフト面の連携連動＝部署の垣根を越えた“チーム”による活動(アメリカのチーム制と日本のチーム制の違い)
- ③教学IRを活かした学生の成長スピードへの貢献＝大学は4年間という限られた時間

最後に

- ・現在の我が国の教学IRの現状は、覚悟を持たずに進められている＝中途半端すぎる
- ・日本の大学に教学IRがなかった時代の卒業生の質は、今より低いのだろうか？
- ・IRはツールにすぎない＝ドイツのサッカーと同じで、メインはサッカーの試合をして勝つことであり、それをバックアップする一つのツールがIRなのである(わき役だが、かなり渋く利いている。だが、サッカーではIRより大切なことがとても多い、教育も同じではないか)

最後に

目的・目標の明確化
なくしてIRなし！！